

南イタリア・プーリア州の都市と地域の再生に関する研究

代表 陣内秀信（法政大学工学部建築学科 教授）

委員 稲益祐太（法政大学大学院 博士課程）

委員 浦田裕彦（法政大学大学院 修士課程）

〔研究報告要旨〕

本研究は、南イタリア・プーリア州における都市と地域の再生手法を明らかにすることを目的に行われた。プーリアは、近代においてイタリア国内の南北格差に悩まされ、その中で特に港町では著しく旧市街の求心性を失ってきた。しかし、近年になって自らが持つ歴史や自然に立脚した資産の活用が急速に進んでいる。21世紀に入り、環境の時代と呼ばれる今日、プーリアは都市と地域の再生手法を考えていく際にこの上ない対象である。

本研究の主な資料は、現地での実測や聞き取り調査による。2007年度の調査では、公的機関や店舗・宿泊施設経営者等への詳細な聞き取り調査を重視した。また、郊外や田園における事例も採取し、地域全体の活性化の状況を把握するよう努めた。加えて書籍やウェブサイトからも最新の情報を集めた。

主な研究対象地は、トラニー、ガッリーポリ、モノーポリの三つの港町である。加えて、新市街の外側につくられた「郊外」の事例、さらにその周辺に広がる「田園」の事例も採取した。このように、地域の空間構造を踏まえて事例を集め、分類した上で分析を進めた。

個々の事例分析の手順としては、まず詳細な地図や実測図面等を用いて、既存の都市構造や建築資産を社会資本とともに認識・評価した。次に、資産の活用状況とその背景を政策、法律、産業団体の活動、経営者の動向、人々の価値観の変化から総合的に分析した。その際には、プーリアの活性化に欠かせない「観光」の要素にも焦点を当てた。また、地域共同体が自らの資産を積極的に活用して生まれる内発的な観光のあり方を表すものとして「トゥリズム・スロー」という言葉を用いている。

そして、以上の事例分析を通して、歴史と自然の恵みを生かした再生手法を導いた。東京一極集中のパラダイムに苦しむ我が国の地方都市が、今後自らの資産を認識・評価し、活用していく上で、大きな示唆を与える結論を得ることができた。